ひまわりからのメッセージ

143号
2023.10.12
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

自然界の共存
～杜鵑草（ほととぎす）と瑠璃蛺蝶（るりたては）～

わが家の勝手口から駐車スペースに到るせまい場所に私は杜鵑草を植えています。地味な花で、好き嫌いをたずねられたら、おそらく大方の人は「余り…」と口ごもられるのではないかと思います。

九月の十日頃でしたが、葉の裏に一匹の黒い毛虫を見つけました。たしか去年も一昨年もこの黒い毛虫が葉を喰い荒らしたことを思い出しました。毎日観察していると、毛虫の数は増えていき、杜鵑草の葉は無くなっていきます。毎年退治してしまおうと思いながらも、まあ、いいか…と私の相変わらずのいい加減さで見すごして来たのですが、ふと、この毛虫は蝶になるのか蛾になるのか気になってしまいました。「もし蛾になるのだったら、つぶしちゃうからね」と言いつつ、スマホに撮って調べてみることにしました。でも機械に弱い私のこと、中学二年生の孫の助力もあって、それは瑠璃蛺蝶（るりたては）という蝶の幼虫で杜鵑草を好んで食べるのだと分かったのです。「良かったね。私の身勝手さでつぶされずに済んで…」と、一応毛虫たちには伝えておいたのでした。ところが十月に入って、全く姿が見えなくなりました。さなぎになるために、どこかに移動してしまったのかもしれません。

一方、杜鵑草の方は、下の方の葉は食べられてしまって太い茎だけになってしまったのですが、上の方に伸びた細い茎から小さな葉が出てきて、その先にはかわいい苔が顔をのぞかせています。そういえば昨年も長い茎の先に伸びた細い茎と花を備前焼や信楽焼の小さな一輪挿しに活けたんだったなあと思い出しました。

毛虫たちは葉は食べてしまうのに花芽の部分はちゃんと残しておいてくれたのでした。もちろん、虫たちには、花芽は残しておいてあげようなどという思いは無いでしょうが、植物と虫たちの自然の中での共存を、何だか嬉しく思ったのでした。黒い翅の外縁に青い帯のある蝶が、きっとわが家を訪れてくれることと信じて、楽しみに待つことにいたします。それにしても、現代のぎすぎすした人間社会、生き難さを抱えた人達が増えている社会に在って、ちょっとした心づかいがあればもっと世の中は変わっていくのに……とも思ったことでした。

感覚統合って何なのだ？

～木村順先生の講座を聴いて～

今回、木村先生の講座を聞かれて、いかがでしたか？一応、前回の「ひまわりからのメッセージ」に基礎感覚としての平衡感覚（前庭覚）と固有覚と触覚について大まかに記述しましたが、「もっと実践的な話が聞きたかった」。「何だか難しかった」。「もっと聞きたい」等々、色々な感想が寄せられました。

私は、木村先生が感覚統合の知識よりも先に、私たちに「学ぶ」ということの大切さについて話されたことが、記憶に残っています。

私たちは石頭症にかかっている？

「石頭症」ということばは、日本福祉大学の教授であった、今は亡き近藤薫樹先生のことばだそうです。「石頭症」には大きく分けて二つのタイプがあり、一つは、えらい人のことばをうのみにする教条主義、もう一つはベテランがかかりやすい経験だけにしがみつく経験主義で、この「石頭症」には三つの共通点があるというのです。

①目の前の〝この子〟への理解が希薄で、自分の実践を振り返ろうとせず悩んでいない。

②保育者、療育者、教育者として主体性に乏しい。自分で考えようとせず過去の経験やお偉い人の見解で代用してしまう。

③教条主義や経験主義に自分が陥っているという自覚症状がない。

どうでしょうか？木村先生は、一方的に講義されず、フロアーの私たちに向かって、常に「何故？」とたずねられました。つまり、「大丈夫ですか？あなたは主体的に学ぼうとしておられますか？」という問いかけをして、私たちの持つ「石頭症」という心の歪みに気づかせようとして下さっていたのです。知識として知りたいと思って講座に参加された方にとってはちょっと刺激的な進め方でした。

健常児ってどんな子ども？

この質問にどう答えるのでしょう？私たちは定型発達と言っていますが、その根拠として様々な発達検査（遠城寺式、津守稲毛式、K式など）や発達理論に基いて、何歳何ヶ月頃には○○が出来るという知識をもっています。そして年月齢を揃えることで一斉指導や集団活動が可能になるわけです。木村先生は、年月齢に大人

が無頓着でいると指導が一律化、画一化してしまう恐れがあるのだが、この一律化・画一化指導であっても伸びていく子が粒ぞろいの健常児と言われていました。

でも私たちが関わる子どもたちは、そういう画一化の中では育ちにくい子どもたちです。困っている子どもたちです。そして、困っている子どもたちは、その時、その場、その状況に合わせていく力、つまり適応力の低い子どもたちです。明らかな障害として診断名はつけられてもいません。でもこの子たちに関わっていく私たちこそ適応力が必要なのだと思いました。

マニュアルを参考にしながらも、その時、その場、その状況に合わせて、過去の実践経験を振り返りながらも臨機応変に対応し、権威ある先生の見解を取り入れながらも創意工夫して目の前の子に合わせて指導支援をしていくということができなければ結局は画一化指導にならざるをえないということになります。

子どもたちは一体何に困っているのでしょう。ことばの世界で生きている私たちに、どうしたら子どもたちの内面を見ることができるのでしょうか。目の光、視線、表情、動作、行動など子どもたちが示すサインをどう受け取っていくのか、大きな課題です。

木村先生は、子どもたちがいつ、何が出来るようになるかという「発達段階論」だけでなく、何故、いかにして出来るようになるのかという「発達メカニズム論」を学ぶ必要があるのだと説かれています。そして、障害名や診断名がどの様な基準で診断されるのかという「診断基準論」だけでなく、何故、いかにしてその症状になるのかという「症状メカニズム論」も学ぶ必要があると説いておられます。これは難しいですよね。

ただ、私たちは、まず知るというところから始めるということはまちがいないことです。しかし、「知る」から「解る」に至るには、主体的に学んで「何故？」への気付きと「観察力」が大切であることも、この講座から学ばせてもらいました。

「子どもに寄り添いましょう」と教えられて、ただ寄り添っているのは、ながめているだけですから、気になる所、心配なところなどを言葉にしたり、文字化したりして、まず観察力をアップさせましょう」という木村先生のアドバイスを受けて「早速に実行してみました」という保育園もありました。学ぶということ、知識を深めていくということは、まず行動してみる、実践してみることだと保育園の先生方に教えていただきました。

「基礎感覚」って？

困りのある子どもたちは適応力の低さがあると前述しましたが、その背景に基礎感覚の発達の崩れがあると考え

るのが感覚統合の考え方です。もちろん、その理論の基礎には大脳生理学があります。脳、特に前頭葉は、感情、衝動性のコントロール、思考力、やる気などを司っていると考えられています。私たちが歩くのも話すのも行動の全てが脳の働きによるものですから、脳のことも知っておく必要があるでしょう。

さて、固有覚、平衡覚(前庭覚)触覚を基礎感覚と考えられていますが、これらの感覚は無意識に使っている感覚なのです。これに対して、意識して使える聴覚や視覚は高次感覚と呼ばれています。

基礎感覚を学ぶことは、大筋で感覚統合の話ということになります。

高い所が好きでのぼり、危いと何度言っても上る子、ピョンピョン跳びはねている子などは、とてもバランスが良い子だと思われがちです。でも実は平衡感覚の弱さがあって本人は自己刺激を入れていたりします。触覚の問題があると、自分から先生と手をつなぎに来るのに、こちらからさわろうとすると拒否することもあります。やさしいさわり方や指先に力を入れたさわり方は嫌だけれども掌全体で圧をかけたさわり方は受け入れられるということもあります。

感覚統合療法に使うトランポリンやセラピーボール、ハンモック、ホーススイング、ボールプールなど多くの遊具を設置している事業所も多いでしょうが、一人ひとり目の前の子にとって、どの様な強さで、どんなやり方でかかわっていくのかということが実は重要なのです。

昭和の時代とはちがって、子どもたちの遊びそのものが大きく変化してきている現代。当然子どもたちの体や手指の発達、感覚の問題も変わってきています。何故この子はこういう行動をとるのだろう、どうしてこういう体の動きをするのだろう……と考えた時、私たちは自分の実感におきかえて子どもの動きを理解していく必要があるのでしょう。

感覚統合って奥が深いなあと実感させられた研修でもありました。

＜次年度の予定＞

6/29(土)〜6/30(日) ソフトピアジャパンセンターにて木村順先生を再びお呼びします。

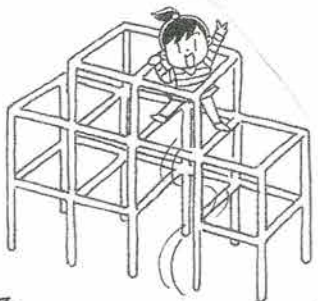
今回のつづきを是非うかがって、学びましょう!!

11月の予定

11/1(水) ピアサポート ソフトピアセンター

11/13(月) センター親の会 スイトピアセンター 6F

11/25(土) 家族会 ソフトピアセンター



(『育てにくい子にはわけがある』より)